

福井直樹著

## 自然科学としての言語学

生成文法は何か

大修館書店，2001年  
B6判 286ページ 2300円（大体）

郡司隆男  
（神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所）

いわゆる「文系」「理系」という区別はそもそもあまり意味のない区別ではあるが、言語学という学問は多くの門外漢にとって「文系」の学問であろう。今日でも、大学に言語学科があるとしたら、それは理学部でなく文学部に存在する可能性が高い。

しかし、言語学の内部から見ると、言語学という学問はかなり幅が広い学問であり、「文系」という性格づけがあてはまらない分野もある。特に、「理論言語学」と呼ばれている分野は、言語の音、文法構造、意味などについて数学的に研究する分野であり、数学ないし情報科学の一分野とされる形式言語理論と道具立てはかなり共通している。そのため、理学部の中で研究されていてもおかしくない分野なのである。

言語音の物理的特性を研究する音声学や、昔から論理学者の研究の対象であった意味論が多分に「理系」的な性格をもつことに意外性はないだろう。また、19世紀までの歴史言語学（＝比較言語学）が、言語の系統性の立証ということに関してかなり厳密な基準を立て、ヨーロッパの諸言語の系統について画期的な成果をあげたことも、言語の研究に科学的方法論が無縁でないことを物語っている。

しかし、文法というようなものまで理論的な研究の対象になるということは、多くの人（理系・文系を問わず）にとって意外かもしれない。実際、20世紀になるまではそのような発想は言語学者の中にもなかったと言っていいだろう。

一言誤解のないように断っておくと、ここで言う「文法」とはいわゆる記述文法である。人間の言語活動を観察して得られる一般化を普遍的な原理で説明しようとする理論である。学校で教わるような文法を規範文法と言うが、これは単なる「きまり」であり、科学的に研究する価値はない。一方、われわれ人間が脳の中に共有している、言

語に関する規則性は、科学的な研究に値するし、人間の脳の機能の解明に重大な貢献をするものである。

実は、言語研究を科学化しようという試みは20世紀の前半にも萌芽的な試みはあったのだが、それは科学とは何かということをも多分に誤解していた試みであった。当時の行動主義心理学や論理実証主義の影響のままに、観察可能なもの以外の一切を認めないという方法論は、言語の意味を扱うことを排除するという形にいかざるを得ず、また、人間の心の中で何が起きているかを問題にすることをタブーにするしかなかった。

文法研究の科学化が、はっきりとした結果の出るような形をとるようになったのは20世紀後半のChomskyによる生成文法の誕生以降であると言ってよい。Chomskyは、人間の言語は脳の中に生物学的に組み込まれた一種の器官（言語機能）によって営まれていると考えており、究極的に脳科学が言語を解明するという想定のもとに、理論を構成している。

もっとも、彼自身が脳科学に携わっているわけではないので、自分では非常にマクロなモデルをたてるだけで、ミクロのレベルでそれを検証することは他分野の研究者に委ねるという形にしている。この点は非常に大雑把に言えば理論物理学と実験物理学との関係に似ているかもしれない。ただし、理論言語学に対する実験言語学という分野は、存在はするものの、後発の存在である。fMRIやMEGなどの脳研究に役立つ医学的機器に言語学者がアクセスできるようになったのは最近のことなので、今までは理論的なモデルの擁立の方が先行してきていると言えるだろう。

文法の理論的なモデルは演繹的に立てられる。特に1990年代以降のモデルは非常に少数の一般的な原理から言語現象の実際のあらわれ方を導出するような方向に向かっており、非常に抽象度の高いものになっている。本書でも概要が示される「極小モデル」というプログラムはそのような方向の研究の1つを示したものであり、はっきりした理論の形になるにはまだ時間がかかるだろうが、素粒子理論が大統一理論をめざすのと同じような発想に立っている。

ただし、生成文法の誕生から50年近くがたと

うとしている 21 世紀に入っても、言語学が科学であるということが学界内部の共通の認識であるとは言い難い。つまり、部外者から見ての認知度が低いということに加えて、言語学の内部にもそのような認識が足りない研究者が少なくないのである。

そこで、本書は、部外者、特に自然科学の研究に携わっている人に対して理論言語学は科学なのだということを啓蒙する一方で、内部的にも、そのような認識の足りない人へ苦言を呈するという二重の目的をもって編まれている。

本書を今まで言語学の専門書をまったく読んだことがない人が読む場合でも、細部には捉われないうで読みすすめれば十分に著者の意図は伝わると思う。実際、一定の前提なしでは読めないという部分がそれほどあるわけではない。むしろ、もともと横書きで書かれたかなり専門的な文章を含むものを集めたものであるだけに、縦書きで科学を読むときにしばしば感じる、まどろっこしさを感ずる読者もいるかもしれない。「理系」の読者には、オリジナルな形か、あるいは英語のテクニカルな論文の方が著者の言わんとすることがずっと頭に入るのではないだろうか。

評者が個人的に特に興味深く感じたのは、書き下ろしの章の第 7 章である。ここでは、著者の勤務先のカリフォルニア大学（アーバイン校）のカリキュラムを具体的に紹介しつつ、日本での言語学教育の問題点について、やや熱く語っている。アメリカの大学の言語学科のカリキュラムを見ると、そこでおこなわれている教育の方針は「理系」でのものと大差がないことがわかる。学問には基礎となる科目があり、それを修得した上で次のより高度な科目に移るということが系統的におこなわれているのである。日本の典型的な文学部のカリキュラムでは、おそらくこのような系統性はあまり重視されず、むしろ担当する教師の「個性」に基づいた様々なトピックが恣意的にとりあげられるということが多いのではないかと思う。そして、それが言語学の教育にも悪い影響を及ぼしているのである。

著者は、アメリカの多くの大学では普通のこととなっている、このような教育体制がなぜ日本での言語学の教育に取り入れられないのかという点

に疑問と義憤を感じている。もちろん、日本にもそのような教育体制をとっているところがないわけではないのだが、公平に見て、多数派とは言えないだろう。

いまだに小講座制をとる大学が多いなど、問題は、日本の（特に「文系」の）学問の体制そのものにも関わるので、著者の憤りにもかかわらず、すぐには変化は起きないかもしれない。現在でも言語学を志す優秀な学生は欧米、特にアメリカに留学するのが常識のようにになっている。科学としての言語学の教育に関しては日本は著しく遅れているのである。

ただ、一筋の光明は、外国留学を体験した世代が今や日本の大学のカリキュラム編成に関わるようになってきたので、少しでも隔差を狭めるべく、新しい体制を作っていく兆が見られるようになったということである。次の世代には著者の心配が無用のものとなっていることを期待したい。